

第2章 国語科における考え方と実践例

1 国語科において課題を解決するために必要な資質・能力とは、どのようなものか

国語科の目標において規定される資質・能力は資料2-1に示すように、①国語による表現力と理解力、②伝え合う力、③思考力や想像力及び言語感覚、④言語文化に対する関心、国語を尊重する態度の4点である。次期学習指導要領改訂に向けた中教審答申においては、国語科において育成を目指す資質・能力を「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の「三つの柱」に沿って整理を行っている。

この「三つの柱」は、学校教育法に規定される「学力の三要素」に基づくものである。「学力の三要素」及び「三つの柱」と現行学習指導要領の国語科の目標に規定される資質・能力との関連を踏まえ、国語科における課題を解決するために必要な資質・能力を資料2-2のように表すことができる。これは、児童生徒が、授業を通して身に付けていくイメージを自動車を例に模式的に表したものである。

国語科の学習は、「国語への関心・意欲・態度」をエンジンとして、「言語についての知識・理解・技能」と「話す・聞く能力、書く能力、読む能力」の両輪を働かせながら課題解決していくイメージで捉えることができる。

これらの資質・能力は、学習過程における課題解決の場で発揮される学習活動を通して相乗的に高まることが期待できる。

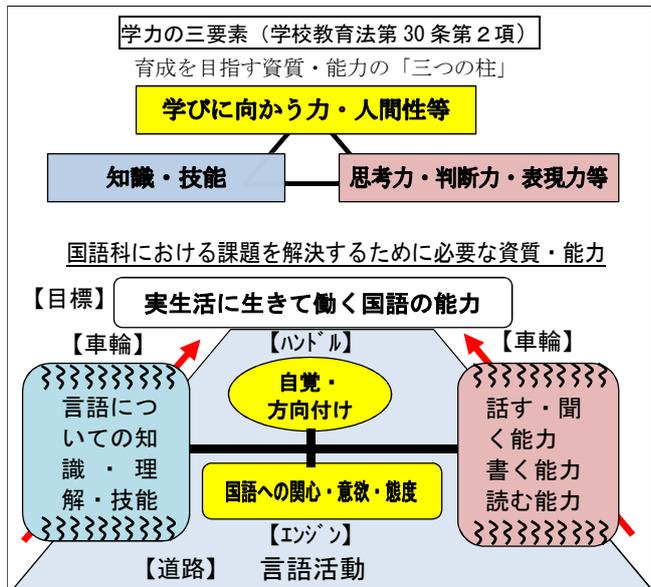
このような学習過程においては、児童生徒自らが課題解決の見通しをもったり、解決の結果や過程を振り返ったりして、自己の高まりや修正点を自覚することが重要である。このような自覚が、自己の学習の方向付けや価値付けを可能にする。まさに自動車のハンドルの役割を果たすのである。

また、資料2-3に示すように国語科は、実生活や各教科等の学習につながる具体的な言語活動を通して指導事項を身に付ける教科

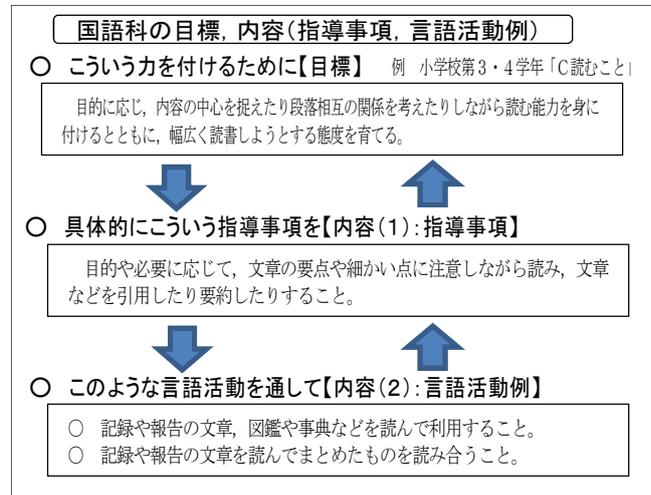
資料2-1 国語科の目標

<p>【小学校】 国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、<u>伝え合う力</u>を高めるとともに、<u>思考力や想像力及び言語感覚</u>を養い、<u>国語に対する関心を深め国語を尊重する態度</u>を育てる。</p> <p>【中学校】 国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、<u>伝え合う力</u>を高めるとともに、<u>思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度</u>を育てる。</p> <p>【高等学校】 国語を適切に表現し<u>的確に理解する能力</u>を育成し、<u>伝え合う力</u>を高めるとともに、<u>思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重</u>してその向上を図る態度を育てる。 (※下線は筆者による。)</p>
--

資料2-2 課題を解決するために必要な資質・能力



資料2-3 国語科の目標と内容の関連



である。このことから、課題を解決するために必要な資質・能力の育成に当たっては、児童生徒に課題解決的な言語活動を、主体的・協働的に展開させることが重要である。

このような課題解決的な学習を展開するに当たっては、資料 2-4 に示すように、どのような学習過程において、どのような資質・能力を重点的に育成するのかを明確にし、授業を展開したい。そのために、表出させたい児童生徒の姿を具体的に想定し、教師の働き掛けを具体化しておくことが重要である。

課題解決のそれぞれの過程において、児童生徒自らが、既習の「言語についての知識・理解・技能」や「話す・聞く、書く、読む能力」を発揮しながら課題を発見し、解決の見通しをもち、主体的・協働的に課題解決する中で、これらの能力は更に高まっていく。

そして、課題解決の過程の中で、児童生徒自らが自己の高まりや修正点を自覚することで、「国語への関心・意欲・態度」も、更に高まることが期待される。

2 国語科において解決に取り組ませるべき課題は、どうあるべきか

国語科の特性を踏まえ、言語活動を通じた課題解決的な単元構想(資料 2-5)になるように工夫したい。

そこで、国語科において取り組ませるべき課題を全体論 (p. 7)の課題設定の視点を踏まえて設定することが大切である。児童生徒が主体的に言葉と関わりながら解決すべき課題を見いだしたり、よりよい解釈や表現を協働的に追究したりできるような課題を設定することが重要である。

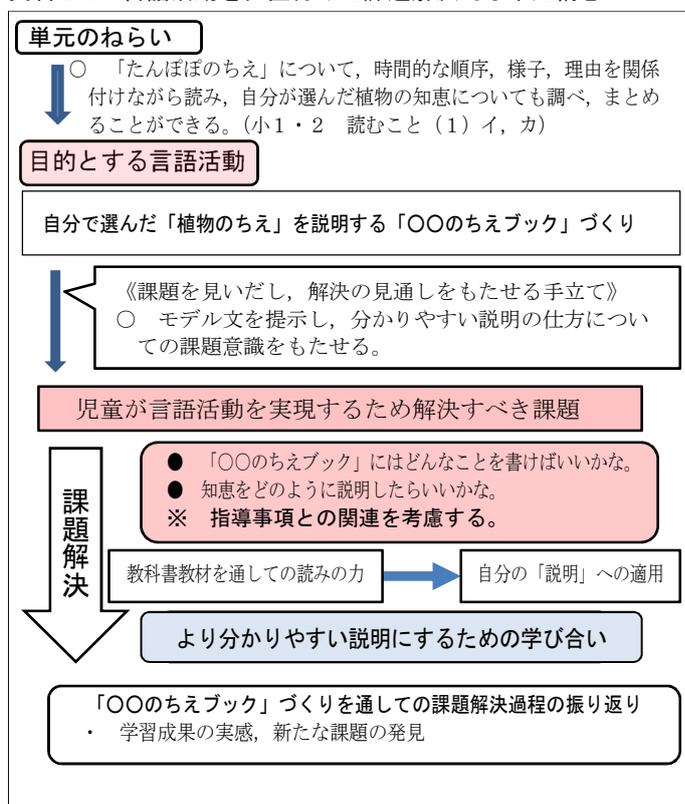
このような課題を設定するために、重要なポイントになるのが、単元に位置付ける言語活動である。児童生徒が言語活動の実現に向け、主体的・協働的に課題解決していく学習過程を実現する言語活動の要件として、資料 2-6 の 3 点が挙げられる。

資料 2-4 国語科における課題解決的な学習の過程における具体的な姿の例

過程	具体的な姿の例	言語についての知識・理解・技能	討・動・書・読能力 書く能力 読む能力	国語への関心・意欲・態度
課題の把握・追究の見通し	・ 目的意識や相手意識をもち、主体的に言語活動に取り組もうとしている。			◎
	・ 目的とする言語活動を実現するために、解決すべき課題を見いだすことができる。	○	◎	○
	・ 既習事項を基に、課題解決に必要な知識や技能を選択することができる。	◎	○	
課題の追究	・ 課題解決に必要な情報を的確に取り出し、統合することができる。	◎	○	
	・ 課題解決に必要な情報(非連続型テキストによる情報を含む。)を比較したり、関連付けたりしながら、自分なりの考えをもつことができる。	○	◎	○
	・ 自他の考えの共通点や相違点からもの見方・考え方を広げたり、深めたりすることができる。【協働的な学び】		◎	○
課題の解決	・ 調べたり、交流したりして学んだことを基に適切に解釈したり、表現したりすることができる。	○	○	◎
	・ 自分の学習状況を振り返り、学んだことの価値や自分の高まりに気付くことができる。	○		◎
	・ 学習したことを自分の言語生活に生かそうとしている。			◎

(◎ 主に育成される資質・能力 ○ 付随して育成される資質・能力)

資料 2-5 言語活動を位置付けた課題解決的な単元構想



資料 2-6 主体的・協働的な学習過程を実現する言語活動の要件

- ① 課題解決に向けて主体的・協働的に学習に取り組む中で、当該単元のねらいを実現できる言語活動（指導事項との関連が図られた言語活動）
- ② 目的意識や相手意識が明確であり、児童生徒が既存の知識・技能を基に解決すべき課題を見だし、実現の見通しをもつことができる言語活動
- ③ よりよい表現や解釈の追究を目的とした、児童生徒が協働的に思考・判断・表現できる場を設定することができる言語活動

3 国語科において児童生徒が主体的・協働的に学ぶためには、どのような工夫が効果的か

(1) 工夫の視点

国語科では、様々な事物、経験、思い、考え等をどのように言葉で理解し、どのように言葉で表現するかという、言葉を通じた理解や表現を追究しながら自分の思いや考えを形成し深めることを重要な学びとしている。

このような学びを実現するためには、児童生徒自身が目的や必要性を意識して取り組める学習となるよう、自分自身の言葉についての理解や考え方を振り返りながら解決すべき課題を見いださせたり、追究の見通しをもたせたりする場を工夫することが大切である。

課題追究においては、他者と知見や考えを伝え合ったり、議論したり協働したりすることで多面的・多角的な思考や表現を実現させることが可能である。

また、授業を通して身に付けた国語の能力を実感できるよう、自分の学びや変容に気付くなど、自覚化につながる振り返りの場を工夫することも効果的である。

(2) 「判断基準」の設定に基づく評価

授業においては、課題解決的な学習やペアやグループでの協働的な学習活動が形式的に展開されることのないよう留意したい。

国語科の授業においては、目的とする言語活動の実現を通して、どのような資質・能力（指導事項）を身に付けるのかを明確にしておかなければならない。そのためには、児童生徒の言語活動をどのように評価するのかを具体化しておく必要がある。そこで、当センターが提唱している「判断基準」の設定による指導と評価を授業づくりに活用したい。資料 2-7 に「判断基準」設定の具体例を示す。教師が、「判断基準」に基づく課題解決を実現した児童生徒の学習状況をあらかじめ想定することにより、的確な評価や個に応じた補充指導、深化指導を具体化することが可能になる。このような指導と評価の一体化を図ることが、国語科として身に付けさせたい資質・能力の育成につながるのである。

資料 2-7 「判断基準」設定の具体例

評価規準（「思考・判断・表現」）
○ 読む能力 「たんぼのちえ」について、時間的な順序を表す言葉、様子、理由を関係付けながら内容の大体を読み、自分が選んだ「植物のちえ」について時間的な順序、様子、理由を関係付けながら説明している。 （読むこと イ）
思考、判断に基づく表現内容（評価の対象）
○ 自分で選んだ「植物のちえ」を説明する「○○のちえブック」（ワークシート）
判断の要素
ア 時間的な順序 （時間的な順序を表す言葉） イ 様子と理由の因果関係 （様子や理由を表す言葉）
判断基準B（おおむね満足できる状況）
ア 時間を表す言葉を見付け、様子（～のです。）と理由（～からです。）を区別しながら、「たんぼのちえ」の内容の大体を読んでいる。 時間を表す言葉を「ちえブック」にまとめている。 イ 「問い」と「答え」の関連を手掛かりにしながら「たんぼのちえ」の内容の大体を読んでいる。 植物が、ちえを働かせる様子と、その理由を「ちえブック」にまとめている。
評価を生かした指導（C状況の児童に対して）
○ 「たんぼのちえ」の構成を振り返らせ、時間的な順序で段落を並べ替えさせ、つなぎ言葉について助言しながら文章を書かせる。 ○ 様子、理由の関係を「問い」と「答え」の関係に着目するよう助言する。

(3) 言葉による見方・考え方を働かせ、自覚・方向付けを促す学習指導の工夫

国語科の授業において、主体的・協働的な学習が、児童生徒にとって深まりのある学習になるためには、資料2-8に示すような児童生徒が既存の言葉による見方（言葉の意味、言葉の働き、使い方の理解など）・考え方（自己の考えを形成するための考え方・感じ方など）を働かせ、解決すべき課題を見いだしたり、解決の見通しをもったりすることが重要である。学習の見通しをもたせるためには、単に学習の進め方を確認させるだけでなく、これまでの学習（課題解決の過程）を振り返らせることにより、「自分は何ができるようになり、何が分からないのか、何を解決すべきなのか」を十分に認識させることを大切にしたい。学習の振り返りにおいても学習の結果のみを評価させるのではなく、「どのようにして自分の考えを形成できたのか」、「どのような言葉についての気付きから自分なりの考えや表現を成立できたのか」という学習の過程を振り返らせることにより、自分自身の学習の価値付けができるように工夫することが効果的である。

資料2-8 自覚・方向付けを促す学習指導の展開例 小学校第5学年「書くこと」

<p>5 本時 (3/7)</p> <p>(1) 目標</p> <p>ア 主張とグラフから読み取れることを比べたり、関連付けたりしながら、整合性の取れた考察文を書くことができる。</p> <p>イ 事実と感想、意見などを区別して書くことができる。</p> <p>ウ 効果的なグラフや表の用い方に気付くことができる。</p> <p>(2) 指導に当たって</p> <p>主張と考察文と資料の整合性があるかを確認するために、教師が提示したモデル文とグラフを比べたり、関連付けたりして、資料から読み取れること、そこから考えられること、選んだ資料や考察が適切かどうかを検討する。また、同じ表やグラフであっても、「どの部分」を「どのように価値付ける」かによって伝わる内容が変わることも紹介し、効果的なグラフや表の用い方にも気付かせるようにしたい。</p> <p>(3) 実際</p>			
<p>つかむ・見通す</p> <p>調べる・深める</p> <p>まとめる</p> <p>生かす</p> <p>振り返る</p>	<p>1 前時を想起し、グラフを読む。</p> <p>2 モデルのグラフと考察文を比べて読み、問題点がないか探す。</p> <p>この考察文は正しいような気がするけれど・・・。</p> <p>3 学習課題を立てる。</p> <p>どうすれば、自分の意見と理由にぴったりの根拠になるのだろうか。</p> <p>4 モデルのグラフから読み取れること（事実）を書く。</p> <p>5 自分の考え（考察）を書く（付箋）。</p> <p>6 モデル文の問題点を話し合う。</p> <p>グラフの表題は、「5月に読んだ本の冊数の推移」と書いてある。このグラフから「読書はなはだ起きていない」とは考えにくいなあ。</p> <p>7 学習のまとめをする。</p> <p>グラフから読み取ったことが自分の意見の裏付けとなっているか確認する。そのために、グラフ全体を見たり、一部を詳しく見たりする。また、グラフから読み取ったこと知っていることをつなげて予想できることを書くことよ。</p> <p>8 自分の考察メモを見直す。</p> <p>このグラフからは、長島町の商業に携わる人の一人当たりの年間商品販売額は増えていることが分かる。その一方で、商業事業が滞っているということが分かる。この二つのことから、くらしやすいとはいえないかもしれないなあ。他のグラフを使う必要も出てきたぞ。</p> <p>9 学習の振り返りをする。</p>	<p>時間</p> <p>5</p> <p>14</p> <p>7</p> <p>14</p> <p>5</p>	<p>教師の具体的な働き掛け（※評価）</p> <p>○ 前時の学習を想起させやすくするため、紙板書やノートの前時のために注目させる。</p> <p>○ 本時の学習課題を焦点化させるために、教師自作のモデルを提示する。</p> <p>◎ 「このモデル文には問題点があります。このモデル文をよくするためにはどうすればよいのかを考えて読みましょう。」</p> <p>○ 児童が主体的に問題を解決できるようにさせるため、モデルと問題点を関連付けながら学習課題を立てるようにする。</p> <p>○ 前時の学習を生かしながらグラフを読み取らせるようにするため、読み取る視点を示しておくようにする。</p> <p>※ 事実とモデル文の書き手の考え（意見）の区別をさせるため、考察部分にサイドラインを引かせる。</p> <p>○ 考察文のどこに問題点があるのかを見付けさせるため、児童が用いたグラフから読み取ったこと（事実）と、考察部分（意見）を比べさせる。</p> <p>○ 効果的なグラフや表の用い方にも気付かせるために、同じ表やグラフであっても、「どの部分」を「どのように価値付ける」かにより伝わる内容が変わることも紹介する。また、理由付けを明確にするために、資料の用い方だけではなく、説明の際に使う言葉の使い方にも気付かせるようにする。</p> <p>※ 重点評価項目</p> <p>主張とグラフから読み取れることを比べたり、関連付けたりしながら、整合性の取れた考察文の書き方を知り、自分自身の考察メモに生かすことができている。</p> <p>◎ 「今後の学習で使ってみたいことや、覚えた語句、心に残った言葉などを使ってノートに書きましょう。書き方の例を参考に書いてもよいです。」</p>

本時の学習で働かせるべき言葉による見方・考え方

- 資料からの正確な情報の読み取り
- 根拠となるデータと理論の展開の適切さ

前時までの学習（課題解決の過程）を振り返り、学習の見通しをもつ場

- グラフから情報を読み取るポイントや読み取ったことを説明する言葉の使い方を基に提示されたモデル文を読み、本時の学習課題を見いだす。

【具体的手立ての工夫】

- 学習計画表の提示
- 前時のワークシート
- モデル文の提示

言葉による見方・考え方を働かせた協働的な課題解決の場

- グラフから読み取ったことが、考察（意見）の裏付けとなっているかについて協議しながら納得解を追求していく。

【具体的手立ての工夫】

- ワークシート
- ホワイトボードの活用
- 付箋の活用

「判断基準」による思考・判断・表現の的確な見取り

学習の過程の振り返りによる自己の変容の実感

【具体的手立ての工夫】

- 修正した考察文
- 学習の価値付け（言葉掛け）

事例発表（1）

課題を解決するために必要な資質・能力を育成する授業に関する研究
 —主体的・協働的に学ぶ学習の工夫を通して—
 ~小学校第6学年「筆者のものの見方をとらえ、自分の考えをまとめよう」における実践を通して~

鹿児島市立西陵小学校
 教諭 上野 大輔

I 研究実践の目的

本実践は、小学校学習指導要領国語科第5学年及び第6学年の内容(C読むこと)ウ「目的に応じて、文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえたり、事実と感想、意見などの関係を押さえ、自分の考えを明確にしながら読んだりすること。」を受け、絵と文章とを対照しながら読み、筆者のものの見方をとらえたいうで、自分のものの見方をまとめていくことをねらいとしたものである。

教材「『鳥獣戯画』を読む」は、「鳥獣人物戯画」の一場面について述べた説明的な文章である。筆者が何に着目し、どのように評価しているか、自分の考えをどのように述べているかについて読み取り、解説文を書く言語活動を通して自分のものの見方を広げさせていく。これらの学習を主体的・協働的に取り組ませ、課題を解決するために必要な資質や能力の育成につなげることを意図した実践である。

II 研究の実際

1 単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
<ul style="list-style-type: none"> 絵や絵巻物に対する筆者の見解に興味をもち、文章を読もうとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 筆者がどのようなことを根拠として考えを述べているかを捉えている。 筆者の意図と表現の工夫との関連について考えている。 自分と他者とのものの見方や感じ方の共通点と相違点を明らかにし、自分の考えを深めている。 	<ul style="list-style-type: none"> 文末表現や助詞の使い方など、語句に着目して読み、語句と語句との関係を理解している。

2 単元の指導計画（全6時間）

過程	主な学習活動	時間	教師の具体的な働き掛け
課題の把握・追究の見直し	1 題名を知り、絵を「読む」とはどういうことか考える。 2 筆者を知り、教材文の前文を読み、筆者の絵の見方や感じ方を読み取る。 3 学習課題を設定し、学習計画を話し合う。 「鳥獣戯画」の見どころを探ろう。	1	<ul style="list-style-type: none"> 教材文の「読む」の意味を考えさせたり、筆者の経歴等を紹介したりすることで、教材文に興味をもたせる。 隣県で開催されている「鳥獣戯画展」のパンフレットを見せ、単元のゴールイメージをもたせ、学習課題を設定させる。また、リード文から読みの目的をもった学習計画を立てさせる。
課題の追究	4 筆者が、絵や絵巻物について、どんな感じ方や評価をしているか、絵と文章を照らし合わせながら読み取り、自分の考えや感想をまとめる。 5 筆者の『鳥獣戯画』に対する思いをまとめる。 6 筆者が主張を捉え、考えを効果的に伝えるための表現や構成の工夫について考える。	3	<ul style="list-style-type: none"> 「どの部分の」、「何に着目して」、「どのような言葉で評価しているか」という観点で絵と文章を対応させてまとめさせる。 また、自分の考えをまとめる際も、同じ観点で書き、グループで交流させる。 「『鳥獣戯画』は、（ ）なのである。」の一文にまとめるため、グループで（ ）に当てはまる言葉を文章中から考え、発表する。 学習経験から表現の工夫について、想起させ「書きだしの工夫」、「文末の工夫」、「語りかけ」を見付けさせる。また、この教材文独特の「絵の出し方」、「漫画、アニメとの比較」についても気付かせ、その効果を考えさせる。
課題の解決	7 『鳥獣戯画』の三匹の応援蛙を読み、解説文を書く。【本時】 8 グループで解説文を作成し、解説文を発表したり感想を伝え合ったりする。	2	<ul style="list-style-type: none"> 今までの読み取りの観点や気を付けてきた内容を想起し、自分のものの見方・感じ方を解説文で表現させる。 まとめたものをグループで助言し合わせ、自分の伝えたいことを確認させる。 前時で作成した解説文を基にグループで解説文を作成し、互いに鑑賞させる。同じ絵を解説した文章や違う絵を解説した文章を読み合い、それぞれの感じ方や考え方に違いがあることに気付いたり、自分の考えの深まりや広がりを実感させたりする。

3 課題を解決するために必要な資質・能力を育てる主体的・協働的な授業の展開

8 本時の実際 (5/6)

(1) 目標
『鳥獣戯画』の絵 (三匹の応援蛙) について、筆者のものの見方や感じ方を生かして絵を読み、自分の考えをまとめることができる。

(2) 主体的・協働的に学ぶ工夫
・ 『鳥獣戯画』の中で筆者が触れていない絵の部分に焦点を当てること、筆者を意識させながら「自分だったら」という意欲をもたせ、課題解決を図らせる。
・ 解説書をグループで読み合うことで、自分とは違う観点で絵を分析したり評価したりしていることに気付かせ、深めたり広げたりさせる。
・ 筆者の文章と比較したり、友達の文章を読んだことを中心に学習を振り返らせることで、本時の学びの自覚化を図り、学びの深まりを実感させる。

(3) 展開

時	学 習 活 動	時 間	指 導 上 の 留 意 点
つ か む	1 前時までの学習を想起する。 2 学習課題を立てる。 三匹の応えん蛙のすばらしさはどこだろう。	3 (全)	・ 前時まで読み取ってきた筆者のものの見方や感じ方を想起する中で、「すばらしい」とだけ述べていた三匹の応援蛙に着目し、課題を設定する。
見 通 す	3 学習の進め方を確認する。 ・ 学習内容を確認する。 ・ 課題を解決するための方法を確認する。	7 (全)	・ すばらしさを伝えるための、解説文を書くことを意識させ、解説文に必要なことを教材文から確認させる。
調 べ る	4 『鳥獣戯画』三匹の応えん蛙』を解説する文章を書こう。 ・ 絵の中で着目する部分を決める。 ・ <u>絵と文章を対応させながら、評価の言葉を入れて解説する文章を書く。</u>	15 (個)	・ 絵の中で着目する部分に印を付けさせ、絵と対応した文章を書かせる。 ・ 「全体の説明」→「着目点」→「解説」→「自分の考え(評価)」の構成で記述させる。 ・ 活動が停滞している児童には、筆者の書き方をヒントとした助言を行う。
深 め る	5 グループで作成した解説文を発表する。 ・ 絵と文を対応させながら友達の解説文を読む。 ・ 自分の解説文に加除修正を加える。	13 (グ) (個)	・ 友達の考えや書きぶりを自由に質問できる雰囲気作りを行う。 ・ 友達の解説書と自分の解説書を比較して気付いたことを基に、 <u>自分の解説文を加除修正させる。</u>
ふ り 返 る	6 学習のまとめを行う。 ・ <u>着目した点をはっきりさせる。評価の言葉を使うことで絵のよさを伝えられる。</u> ・ <u>表現を工夫すると楽しく分かりやすく伝えられる。</u> 7 学習の振り返りを行う。 ・ 教材文と自分の文章を比較する。 ・ 協働学習を通し、自分の考えの深まりや広がりを振り返る。	7 (全) (個)	・ 「よさを伝えられる」、「分かりやすく伝えられる」という言葉をキーワードにまとめを行う。 ・ 再度、筆者の教材文と比較させることで、自分の解説文への評価を行わせる。 ・ グループでの交流を通した自分の考えの <u>深まりや文章の高まりを自覚化させる振り返り</u> を行わせる。

判断基準

ア 「三匹の応えん蛙」のどの部分に着目して分析したのか書いている。
イ 取り上げた部分について、絵と文が対応して解説されている。
ウ 自分の見方や感じ方が、評価の言葉で書かれている。

【予想される児童の表現例】

この絵は、蛙が兎を投げ飛ばしたシーンである。周りで笑っている三匹の蛙の格好 団 に注目してほしい。

三匹とも大笑いである。指を指して笑っている蛙。尻もちをついて笑っている蛙。地面に手をつけて笑っている蛙もいる。それぞれの笑い方の格好がちがうのである。兎が蛙に投げ飛ばされたのが、おもしろかったのだろうか。それとも、投げ飛ばした蛙のポーズがおもしろかったのだろうか。とにかく、大笑いしている様子が伝わってきて、笑い声まで聞こえてきそうだ。団

様々な笑い方を表現することによって、この絵を見る方も思わず笑顔になってしまう楽しい絵だ。団

本時の学習で働かせるべき言葉による理解・考え方

- ・ 絵に対する着眼点
- ・ 絵と文章の対応
- ・ 評価と根拠の整合

評価の内容と表現の工夫

前時までの学習(課題解決の過程)を振り返り、学習の見通しをもつ

- ・ 前時までに学習した筆者の解説文の書きぶりを振り返り、「どの部分の」、「何に着目し」、「どのような言葉で評価しているか」という観点で解説するという学習の見通しをもたせる。

【具体的手立ての工夫】

- ・ 学習計画表の提示
- ・ 前時のワークシート
- ・ モデル文の提示

言葉による理解・考え方を働かせた協働的な課題解決の場

- ・ 絵の着眼点、絵と文章の対応、評価の言葉について相互に評価し合い、友達の評価を自分の解説文に反映させる。

【具体的手立ての工夫】

- ・ ワークシート
- ・ 付箋の活用 (レビューカード)

《指導と評価の一体化》

「判断基準」による思考・判断・表現の的確な見取り

学習の過程の振り返りによる自己の変容の実感

【具体的手立ての工夫】

- ・ 修正した解説文
- ・ 学習の価値付け (言葉掛け)

4 言語活動を位置付けた課題解決的な単元構想の工夫

【単元のねらい】

- 絵と文章との関係を押さえて筆者の考え方を捉え、自分の考えを明確にしながらか読むことができる。 [C読むこと (1) ウ]
- 文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。 [C読むこと (1) オ]

【単元における言語活動】

- 意見を述べた文章や解説の文章などを利用し、解説文を書く。 [C読むこと (2) イ]

【相手意識】

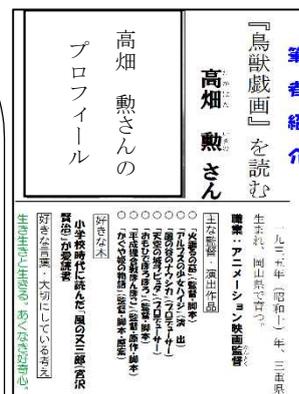
不特定多数

【目的意識】

絵や絵巻のおもしろさを解説するため

【課題を見だし、解決の見通しをもたせる教師の手立て】

- 学習に興味をもたせる教材、筆者、学習との出会わせ方の工夫
 - ・ 教材文の「読む」の意味を考えさせたり、筆者の経歴等を紹介したりすることで、教材文に興味をもたせた。
 - ・ 隣県で開催されている「鳥獣戯画展」のパンフレットを紹介し、「作品を解説する」という活動のイメージをもたせ、単元のゴールイメージを明確にし、学習課題を設定させた。
また、教材文のリード文から読みの目的をもった学習計画を立てさせた。
- モデル文を提示による「解説文」の理解と解説文を書くための自分事の課題を見だしさせる工夫
 - ・ 教師が作成したモデル文を提示し、これまで学習してきた説明文との違いに気付かせ、「解説文」の特性を理解させた。
 - ・ 「解説文」を書くために、「今自分が何を知っていて、何を知らないのか。」「何ができて、どのように使えばいいのか。」「何に自信が無いのか。」について振り返らせ、解決すべき課題を見だしさせた。



「筆者の紹介コーナー」の掲示



「モデル文」の掲示

【児童が見いだす学習課題】

筆者の見方をとらえ、自分の考えをまとめるために

- 筆者は、取り上げている絵の「何を」「どのように」捉えているか明らかにする。
- 筆者は、絵や絵巻に対してどのように評価しているか明らかにする。
- 筆者は、自分の考えを伝えるためにどのような工夫をしているか明らかにする。
- 自分は、絵や絵巻をどのように評価したか表現する。

《協働的な学習の必然性》

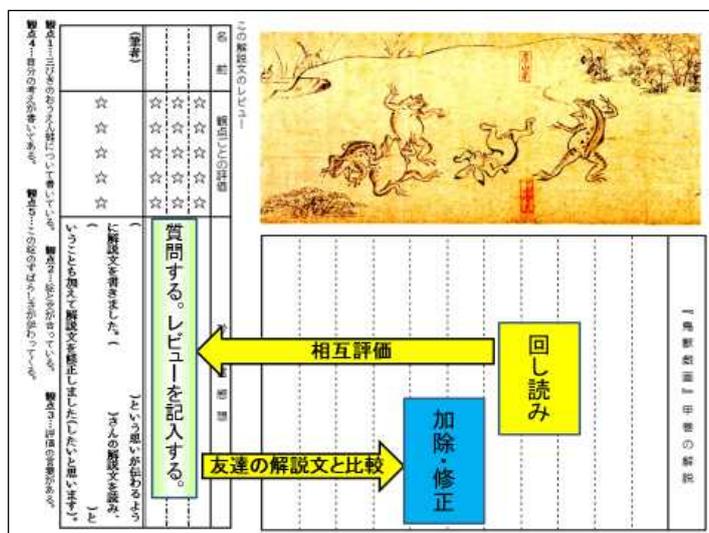
- よりよい解説文にするために、着眼点や表現について多様な見方・考え方にふれ、自分の考えを深めたり、広げたりする。

5 主体的・協働的に学ぶ学習の工夫

(1) レビューカードの活用による双方向の交流活動

本時では、「解説文」としてのよりよい着眼やよりよい表現を追求するための相互交流の場をグループ学習の形で設定した。

児童は、本時の学習で見通しをもった①絵の着眼点、②絵と文章の対応、③評価の言葉について相互に評価し合い、友達の評価を自分の解説文に反映させるようにした。自分の着眼や評価、表現の違いに着目し、着眼や表現などについて相互に質問したり、感想や助言をし合う児童の姿が見られた。

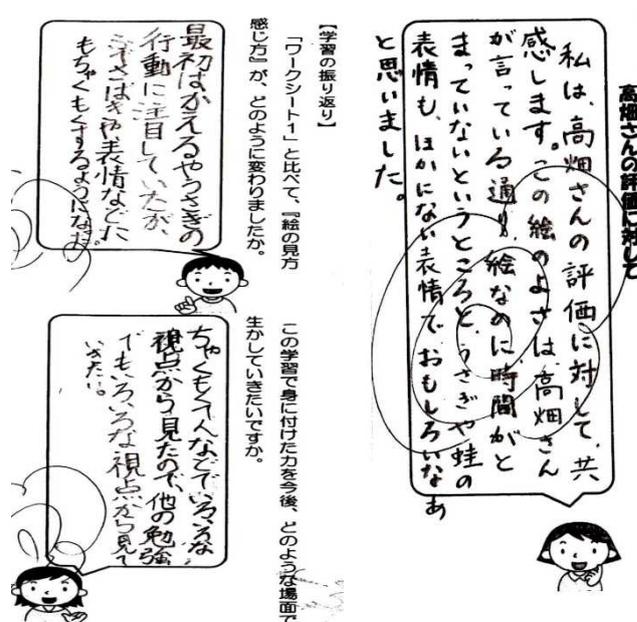


本時で活用したレビューカードの活用

(2) 自己の変容を実感させる振り返りの工夫

児童に自己の課題解決を振り返らせることにより、学習したことの価値付けができるよしいと考え、以下の三つの視点で学習の振り返りを行った。

- ① 筆者の考えに対して、自分の考えをまとめさせる。(知識・技能)
- ② 言葉のよさ、おもしろさを児童なりに価値付ける振り返り
→「誰の」、「何が」、「どのように」自分の考えや表現を深めたり、広げたりしたか。(深い学び)
- ③ 何ができるようになったのか。どのように生かせようか。(実感、成就感)



III 成果と課題

1 研究の成果

- (1) 前時までの学習過程を振り返りながら、解説文を書くための視点や手順についての見通しを確かにしたことで、主体的な学習への取組が見られた。
- (2) 本時の評価規準に基づく「判断基準」の設定により、期待する児童の表現例を予め想定したことにより、学習が停滞している児童やグループでの意見交流が停滞しがちな児童に具体的な指導（助言や資料提示など）ができた。

2 今後の課題

評価の言葉について吟味できるようなグループでの協働的な学習を充実させることにより、新たな言葉への気付きや表現の深まりを期待できるような更なる課題設定の工夫が必要である。

事例発表（2）

課題を解決するために必要な資質・能力を育成する授業に関する研究
 —主体的・協働的に学ぶ学習の工夫を通して—
 ～中学校第3学年「古典に学ぶ—作品の情景や心情を読み取る」における実践を通して～

阿久根市立阿久根中学校
 教諭 湯田 幸治

I 研究実践の目的

本実践は、中学校学習指導要領国語科第3学年の内容(C読むこと)ア「文脈の中における語句の効果的な使い方など、表現上の工夫に注意して読むこと。」を受け、和歌に詠まれた背景を想像しながら、情景や心情を読み取ることをねらいとしたものである。

教材「和歌の世界—万葉集・古今和歌集・新古今和歌集」は、優れた和歌を取り扱っている教材である。それぞれの和歌には、どのような思いがどのように詠まれているのか読み取り、歌物語を創作する言語活動を通して自分のものの見方や考え方を広げさせていく。これらの学習を主体的・協働的に取り組ませ、課題を解決するために必要な資質や能力の育成につなげることを意図した実践である。

II 研究の実際

1 単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
<ul style="list-style-type: none"> 作品の情景や心情を考えながら、自分なりの歌物語を創作しようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 和歌に詠まれた背景を想像しながら情景や心情を読み取っている。 和歌の形式や表現の特徴を捉え、その効果を自分の考えに生かしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親しんでいる。

2 単元の指導計画（全5時間）

過程	主な学習活動	時間	教師の具体的な働き掛け
課題の把握・追究の見直し	1 和歌の意識をもとに、和歌の背景や心情について考える。 2 目的とする言語活動について理解する。	1	<ul style="list-style-type: none"> 和歌が現在の私たちにとっても身近な心情をもとに詠まれていることに気付かせ、学習意欲をもたせる。 「つぶやき」として提示された和歌の意識を基に、その「つぶやき」を漏らした人物の人物像や置かれている状況、心情を想像させる。 <p>《目的とする言語活動の設定》</p>
	和歌の「歌物語」を創作しよう。		和歌の情景や心情を踏まえた歌物語を書く。
課題の追究	3 和歌の歴史的背景や形式・表現の特徴を捉える。 4 共通の和歌で、歌物語を書いて交流する。【本時】 5 和歌に詠まれた情景を捉え、心情を考える。	3	<ul style="list-style-type: none"> 万葉集・古今和歌集・新古今和歌集それぞれの歴史的背景や特徴についてまとめさせる。 和歌の形式・表現の特徴などをまとめさせる。 共通課題「君待つと吾が恋ひをれば我が屋戸のすだれ動かし秋の風吹く」を通して、歌物語の書き方について理解させる。 人物・時・場所や出来事・気持ちなどを想像させ、構成メモに整理させる。 構成メモを基に歌物語を創作させる。 創作した歌物語を相互に交流させる。 第2時で捉えた歴史的背景や特徴、和歌の形式・表現の特徴などを基に、共通課題の和歌に詠まれた情景や心情を捉えさせる。
課題の解決	6 選択した和歌で歌物語を書いて交流する。	1	<ul style="list-style-type: none"> 5首の和歌を提示し、課題を選択させる。 第3時の活動を振り返り、歌物語の書き方を確認する。 歌物語の交流を通して、お互いのよいところを伝えさせる。

3 課題を解決するために必要な資質・能力を育てる主体的・協働的な授業の展開

授業の実際 (3/5)

(1) 本時の目標

「君待つと吾が恋ひをれば我が屋戸のすだれ動かし秋の風吹く」について、和歌に詠まれた背景を想像しながら情景や心情を読み取り，歌物語を作成することができる。

(2) 指導に当たって

和歌に詠まれた情景や心情を読み取るために、叙述を基に人物・時・場所や出来事・気持ちなどを想像させたい。そして、個人で考えた歌物語を、相互に鑑賞し、気が付いた点をアドバイスし、良い点を認め伝え合うようにする。

(3) 展開

選	主な学習活動	時間	指導上の留意点
導 入	1 百人一首をする。	10 (全)	・ 百人一首のうち20首を用い、歴史的仮名遣いや、和歌のリズムに慣れさせる。
	2 前時を想起する。		・ 前時の学習を振り返り、歌集の歴史的背景や特徴、和歌の形式・表現の特徴等について確認する。
	3 学習課題を立てる。		・ 学習課題を設定し、本時の学習の流れについて確認する。

和歌の背景を想像して歌物語を作り、交流しよう。

展 開	4 共通題材を基に、歌物語の書き方を学習する。	15 (個) (全)	・ 個人で、歌物語の構成メモを作成させる。 ・ 全体で、校正メモの内容について確認する。 ・ 歌物語の書き方について説明する。
	5 歌物語を作成する。	5 (個)	・ 校正メモを基に、歌物語を作成させる。 ・ 書けていない生徒には参考資料を示したり、文章例を与えたりして支援をする。
	6 作成した歌物語をもとに相互に交流する。	15 (グ)	・ 相互に鑑賞し、気が付いた点をアドバイスし、良い点を認め伝え合うようにする。
終 末	7 本時のまとめを行う。	5 (全)	・ 相手の文章に対するアドバイスを通して、自分が作成した文章の良い点、足りない点の気づきを自覚化させる振り返りを行わせる。

判断基準

ア 作者の心情や情景を物語として簡潔に表現できている。

イ 解釈した内容を歌物語の形で適切な語句を使って表現している。

【予想される生徒の表現例】

「あの方は私のところにきてくださらないのだろうか。」

そんな風に思っていると、視線を落としていた私の目の端ですだれが動いた。顔を上げたけれど目の前には、秋の風によってかすかに揺れているすだれがあるだけ。今日も訪れることのないあの人を待っている。

本時の学習で働かせるべき言葉による見方・考え方

- ・ 語句の解釈
- ・ 背景の想像
- ・ 情景や心情の読み取り

前時までの学習（課題解決の過程）を振り返り、学習の見直しをもつ

- ・ 歴史的背景や和歌の形式・表現の特徴を振り返り、本時の学習への見直しをもたせる。

【具体的手立ての工夫】

- ・ 学習計画表の提示
- ・ 前時のワークシート

言葉による見方・考え方を働かせた協働的な課題解決の場

- ・ 作成した歌物語を相互に鑑賞し合い、気が付いた点を伝えたり、良い点を認め合ったりする。

【具体的手立ての工夫】

- ・ ワークシート
- ・ 付箋の活用

《指導と評価の一体化》

「判断基準」による思考・判断・表現の的確な見取り

学習の過程の振り返りによる自己の変容の実感

【具体的手立ての工夫】

- ・ 生徒の発言
- ・ 加筆・修正したワークシート
- ・ 学習の価値付け（言葉掛け）

5 主体的・協働的に学ぶ学習の工夫

(1) 付箋による交流活動

本時では、「歌物語」をよりよい物にするための相互交流の場をグループ学習の形で設定した。

生徒は、本時の学習で見通しをもった①情景や心情、②和歌を詠んだ人の想い、③和歌の解釈について相互にアドバイスし、友達のアドバイスを自分の歌物語に反映させるようにした。

本時で活用したワークシート

<p>和歌の世界―万葉集・古今和歌集・新古今和歌集</p> <p>学習課題 「君待つ」との情景を想像し、歌物語をつくらう。</p> <p>君待つと吾が恋ひをれば我が屋戸のすだれ動かし秋の風吹く 額田王</p> <p>あの人が、いつきてくれるかと心待ちにしていると、家の戸口のすだれを動かして秋風が吹くことです。</p> <p>歌物語 構成メモ</p> <p>登場人物はどんな人？ 君（性別 男） 吾（性別 女）</p> <p>誰が何をしている？ 吾が家で君を待っている</p> <p>どんな気持ち？ 早く来てほしい</p> <p>どのような出来事？ 家で君が来るのを待っていて、来たかな？と見て、すだれを動かして作らなう。君は来てくれない。秋の風が吹く。入ってきたら君は来てくれない。秋の風が吹く。</p>	
<p>歌物語を書いてみよう</p> <p>「まだ平なりのかな」 君を待てる時間かとも長く感じる。 かサッ。 すだれが少しゆれた気がした。 さ、すだれを動かしてみよう。 さ、すだれを動かしてみよう。 さ、すだれを動かしてみよう。</p>	<p>交流の後、赤で加筆・修正している。</p> <p>交流の中でよい点を伝えたり、アドバイスを送ったりする。</p> <p>楽しいよな感じで、いいお話を聞けたよな。</p>
<p>君待つ</p> <p>我が屋戸のすだれ動かし秋の風吹く</p> <p>ひとこと感想 女性の行動・心情がよく描かれていた</p>	<p>交流の後、赤で加筆・修正している。</p> <p>交流の中でよい点を伝えたり、アドバイスを送ったりする。</p> <p>楽しいよな感じで、いいお話を聞けたよな。</p>

(2) 協働的な学習の振り返り

協働的な学習により、どのような課題解決ができたかについて振り返らせることにより、生徒は協働的なよさや自己の学習の成果を実感することができた。

<p>ひとこと感想</p> <p>最初は作るのが難しかったけど、何回か友達とかと作ることで、想像力が足りなくなると、どんどんストーリーがとどろくようになった。授業に積極的に取り組むことができたと思う。</p>	<p>ひとこと感想</p> <p>一斉授業に比べて、積極的に話すようになった。自分の口で話すことにより、気持ちよく、相手にしっかり伝えることができた。自分の考えをしっかりと話すことができた。</p>
--	---

単元終了後の振り返り

III 成果と課題

1 研究の成果

- 導入の工夫を行うことで、学習活動を積極的に行う下地が醸成された。
- 前時までの学習を振り返り、歌物語を書くための視点や手順についての見通しを明確にしたことで、主体的な学習への取組が見られた。
- 本時の評価規準に基づく「判断基準」の設定により、学習が停滞している生徒や相互での意見交流が停滞しがちな生徒に具体的な指導（助言）ができた。
- 協働的に学ぶために、生徒が相互に関わり合う場面を設定することで学習意欲の高まり、教え合いによる学習内容理解の深まり、自分とは違った視点の気づきが見られた。

2 今後の課題

評価の内容や協働的な学びの中で学習した内容について、個々が再確認する過程を十分に確保するために課題設定を工夫する必要がある。

課題を解決するために必要な資質・能力を育成する授業に関する研究
 —主体的・協働的に学ぶ学習の工夫を通して—
 ～高等学校第3学年「連句を楽しむ」における実践を通して～

鹿児島県立国分高等学校
教諭 北 宜 義

I 研究実践の目的

本実践は、高等学校学習指導要領国語科現代文Bの内容（読むこと）イ「文章を読んで、書き手の意図や、人物、情景、心情の描写などを的確に捉え、表現を味わうこと」、ウ「文章を読んで批評することを通して、人間、社会、自然などについて自分の考えを深めたり発展させたりすること。」及び、〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕オ「語句の意味、用法を的確に理解し、語彙を豊かにするとともに、文体や修辞などの表現上の特色を捉え、自分の表現や推敲に役立てること。」を受け、連句の創作を通して、句に込められた心情や情景などを的確に捉えてものの見方を豊かにし、自分自身の思いを表現することをねらいとしたものである。本単元では、生徒が級友たちと相互に句を詠み合うことを通して、句に込められた心情や情景などを的確に捉え、言語文化に対する理解を深めるとともに、自分のものの見方、感じ方、考え方を豊かにさせることをねらいとした学習活動を展開した。これらの学習に主体的・協働的に取りまわせることで、課題を解決するために必要な資質や能力の育成につなげることを意図した実践である。

II 研究の実際

1 単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解
級友の詠んだ句を鑑賞し、句に込められた心情などを理解するとともに、自らの人生について考えようとしている。	① 言葉や表現技法、展開に注目し、句に込められた思いを正しく理解し、表現を味わっている。 ② 主題を押さえながら連句を味わい、自分のものの見方を深めている。	連句の特色を捉えた上で、表現の仕方を工夫して自らの思いを表現している。

2 単元の指導計画（全7時間）

過程	主な学習活動	時間	教師の具体的な働き掛け
課題の把握・追究の見直し	・ 短歌や俳句に向き合う姿勢を養わせる。 連句を詠み味わおう	1	・ 指導者が詠んだ短歌や俳句を鑑賞させた上で、実際にどのような思いをどのように表現したものかを解説する。
課題の追究	・ ワークシートを用いながら、自分自身の思いを短歌の形式で表現する。 ・ 意見交換を行う。	1	・ 韻文に対する苦手意識を払拭させるべく、まず200字程度の散文を書くことから取りまさせ、表現したい感動の中心を整理し、よりよく伝えるための表現について考えさせる。 ・ 話し合う際の視点を提示し、それぞれが詠んだ句について、ペアで話し合わせる。
	・ 班分けを行い、連句を作成する。	3	・ 前の句の内容を的確に把握させる。 ・ 生徒が詠んだ句について、その感性を生かしつつ、教師による助言を行う。 ・ 図書室を活用し、創作活動にふさわしい環境を保つ。
	・ グループ学習形式で連句を解釈し、意見交換を行う。（本時）	1	・ 語句の意味や修辞を意識させながら句に込められた心情や情景などを的確に捉えさせ、ものの見方を豊かにさせる。
課題の解決	・ 本単元を振り返る。	1	・ 単元全体を振り返り、連句作成や鑑賞を通して感じたことや考えたことについて、800字程度の文章にまとめさせる。

3 課題を解決するために必要な資質・能力を育てる主体的・協働的な授業の展開

7 本時の実際 (6/7)

(1) 目標
句に込められた心情や情景などを的確に捉えてもの見方を豊かにする。

(2) 主体的・協働的に学ぶ工夫
 ・ 自分達の班で詠んだ連句が、それぞれどのような思いで詠まれたものであるかについて、役割を決めて他のグループに説明させる。

(3) 展開

過程	主な学習活動	教師の具体的な働きかけ
導入 3分	・ 本日の学習内容について確認する。 <div style="border: 2px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 自分達の班で詠んだ連句を、他の班の級友たちに伝え合おう。 </div>	・ 前時までの班活動で自分たちの班が詠んだ連句について、各自が他の班に説明することを意識させる。
展開 44分	・ 前時までの各班から一人ずつ集まって班を作り、自分たちの班の句の解釈を説明する。 ・ 他の班から聞いた説明を前時までの班に持ち帰り、共有及び意見交換を行う。	・ 話し合いの時間を指示して、句の解釈を説明させる。 ・ 表現に注目させながら、各句の主題を捉えさせる。 ・ 他の班から聞いたことを自分たちの班で伝える際のポイントを示し、話し合いの中で話題になったことや、級友たちが関心をもったことや、どのように句を詠んだのか理解させる。 ・ 連句全体を俯瞰的に味わうことによって、もの見方を深めさせる。
まとめ 3分	・ 本時の学習内容を振り返りつつ、次時の予告を行う。	・ 本単元で学習した内容について振り返り、連句作成や鑑賞を通して感じたことや考えたことを想起させる。

本時の学習で働かせるべき言葉による見方・考え方

- 和歌の修辞法とそこに込められた心情について
- 連句の形式と主題

【主体的・協働的に学ぶ学習の工夫】

前時までの学習（課題解決の過程）を振り返り、本時の学習の見通しをもつ

- 前時までに班で詠んだ連句の解釈について他の班の級友たちに説明するという活動を確認する。

【具体的手立ての工夫】

- 前時までの学習内容を想起させ、本単元のねらいを説明し、共通理解させる。

言葉による見方・考え方を働かせた協働的な課題解決の場

- 各班から集まって6つの班を編成し、自分たちが詠んだ連句の主題や表現技法に込めた思いについて説明し、質疑応答を行う。その後、各班に持ち帰って共有する。

【具体的手立ての工夫】

- 表現に着目して説明することや、説明時間の細かな指示を行う。

学習の過程の振り返りによる自己の変容の実感

【具体的手立ての工夫】

- 教師によるまとめ

4 「判断基準」による思考・判断・表現の的確な見取り

本単元の7時間目に、一連の学習活動を振り返らせ、班における連句作成のことだけでなく、各班の作品を連句として味わいながら、連句作成や鑑賞を通して感じたことや考えたことについて800字以内の文章にまとめさせた。評価に当たっては、読む能力の評価規準から、「ア 連句に詠まれた心情を、表現技法に注目して正しく理解している。」「イ 連句を詠む際に自らの言葉で表現している。」「ウ 自身の今後の生き方に対する考えに深まりが見られる。」という「判断基準」を設定して行った。

5 言語活動を位置付けた課題解決的な単元構想の工夫

【単元のねらい】

- 級友の詠んだ句に触れて、詠み手の意図を的確に捉え、表現を味わっている。
[読むこと (1) イ]
- 級友の詠んだ句に触れて、人間、社会、自然などについて自分の考えを深めたり発展させたりしている。
[読むこと (1) ウ]
- 語句の意味、用法を的確に理解し、語彙を豊かにするとともに、修辞などの表現上の特色を捉え、自分の表現に役立てている。
[伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項 (1) ア]

【単元における言語活動】

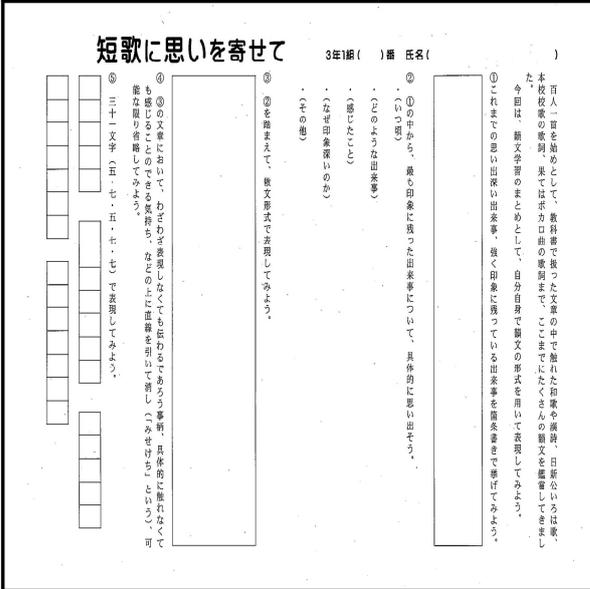
- 表現の仕方を考えて、連句を創作する。

【相手意識】
グループ内、学級全体

【目的意識】
和歌に込められた想いを理解するため

【課題を見だし、解決の見通しをもたせる教師の手立て】

- 学習に興味をもたせる教材、学習との出会わせ方の工夫
 - ・ 韻文の学習に関する既習事項を確認するために、ワークシートを用いて、1・2年次に実施した関連のある学習内容について想起させ、学習の系統性を意識させた。
 - ・ 和歌のモデルとして、教師自らがこれまでに詠んだ作品を紹介し、伝えたい心情をどのような表現に込めているのかに注目して鑑賞させた。
- 自分事の課題を見いださせるための工夫
 - ・ まず自分自身の心情を散文形式で表現させ、その心情を31文字で伝えるためにはどう表現すればよいか考えさせた。



導入時のワークシート

【生徒が見いだす学習課題】

連句を詠み味わうために、

- 和歌と修辞法の効果について明らかにする。
- 級友の詠んだ和歌に込められた心情について明らかにする。

《協働的な学習の必然性》

- 級友が詠んだ和歌を受けて、その内容を基に和歌を詠むために、表現と内容について考察し、自分のものの見方を深める。

6 主体的・協働的に学ぶ学習の工夫

(1) 生徒たちによるグループ編成

協働的な学習活動を活性化させることを狙いとして、各グループは、人数を常識の範囲内にすることを条件として、生徒たち自身に編成させた。

連句において、発句は最も重要であるため、班員全員で考えさせ、続く脇句からは一人ずつ詠ませた。一人が複数の句を詠むこととなるが、句をつける相手を必ず変え、グループ内での相互交流が図られるよう工夫した。

青い日々巡り来る夏思い馳せ 袖に隠した空知らぬ雨	花びらを流すかのよう五月雨 枝の青葉に命吹き込む	春の香りに夢誘はるる 花音	道しるべ色付き吹きたる桜風 瞳	まばゆい光我の心に 咲貴	水面の月をのぞみて手遊ぶと うらら	染まりし白に未来を思う 桃花	降りし雪たらずむわたりし銀世界 七星	友との約束みず散りゆく 葵	振り返りなびく黒髪紅葉まち 七星	去る日々感じ風は涼しく 桃花	夕暮れに前ゆく友の影のびて うらら	されど叶わずはかなく散りぬ 咲貴	高鳴りが止まらぬ夏に君想い 瞳	横顔照らす空に咲く花 花音	闇夜にも沈まぬ君が笑う声
-----------------------------	-----------------------------	------------------	--------------------	-----------------	----------------------	-------------------	-----------------------	------------------	---------------------	-------------------	----------------------	---------------------	--------------------	------------------	--------------

グループで詠まれた連句

グループで18句を詠み終えた後、各班

ごとに自分たちで完成させた連句を味わわせた。自身の句は、どのような流れで詠まれたものであったのか、自身の句は次の生徒にどのように解釈されたのか、グループ全体として、どのような作品となり得たのか、という点について、特に指摘せずとも、どの班も活発かつ積極的に意見交換を行っていた。グループ間の交流は、6か所の卓を設け、各班から集まった代表者がそれぞれ順番に説明及び質疑応答を行い、最終的に各班に持ち帰って情報を共有するという形式で実施した。具体的に発句から第6句、第7句から第12句、第13句から挙句までを2人ずつで担当し、それぞれ意見交換を行った。各班それぞれが自分たちの作品に愛着を持って説明する任を全うするべく、通常の授業時では見られないほどの熱意が感じられた。最後に元の班に戻って、自分たちでは気付くことのできなかった指摘や寄せられた感想などを語り合う際には、本單元において最も活発な学習姿勢が見られた。

(2) 自己の変容を実感させる振り返りの工夫

本單元の一連の学習活動を振り返らせ、連句作成や鑑賞を通して感じたことや考えたことについてまとめさせた。表現活動の苦手な生徒でさえも、ペンを止めることなく一心に用紙に向き合っていた。生徒の感想から、「発表という形で同じグループの人や別のグループの人の表現や前の句とのつなげ方、言葉の選び方など真似したくなるような句ばかりで同級生とは思えない力に驚きを隠せなかった。季節をテーマにただけでも、遠回しの表現だったり直接的な言葉遣いだったり、とにかく感動するばかりだった。私もクラスメイトの素敵な句に恥じないようと、言葉を選んでつくるように心がけた。」「連句というのは、こうした自分と（他者と）の感性の違いを楽しみながら作っていくものではないだろうかと思う。」など、単元を通しての学習の成果を実感している様子がうかがえた。

III 成果と課題

1 研究の成果

- (1) 現代でも身近な教材を工夫することで、生徒が自分に関わることと捉えて主体的に取り組む様子が見られた。
- (2) 自身の考えをまとめ、グループで交流して発表する学習を通して、各自の思いを伝え合うことの喜びや楽しさを味わわせることができた。

2 今後の課題

交流の場面において、全員に説明させる時間を確保するために、教師主導になり十分な意見交換ができなかった部分があった。効果的な交流のさせ方について工夫が必要である。